

漢語の仮名書き

今 野 真 二

要旨

「漢語は漢字で書く」ということが一般的であることを認めた上で、「漢語の仮名書き」ということがどのような場面で、どのように行なわれていたか、ということを考えるための手がかりを得ることを本稿の目的とした。和語の仮名書きがひろく行なわれていたことと比べて、漢語を仮名書きする機会は多くないことが推測できる。したがって、漢語の仮名書きは「かつてその語が仮名でどう書かれていたか」ということをあまり意識しないで行なわれていた可能性がたかい。そうであれば、それは自身の発音を仮名で書くという「表音的表記」発現の場であつたことになる。そう考えた場合には、中世に編集された「古本節用集」における漢語の仮名書きの「揺れ」は、その時点での書き方が「揺れ」ていたことを示している。その一方で、江戸時代末期に編集された『文章仮字用格』においては、一定した書き方が提示されている。漢語の仮名書きということがらにおいて、中世(十五世紀末頃)から江戸時代末期(十九世紀半ば頃)までの間にどのような推移があつたかを明らかにすることが重要であることが判明した。

はじめに

まず本稿で使う用語について定義しておくことにする。日本語とは異なる言語である中国語が、日本語の中で使用された場合に「漢語」と呼ぶことにする。「漢語」は、言語単位としては、「語」を単位として使われる呼称で、本稿もそれに従う。したがって、日本語とは異なる

る言語＝外国語として「中国語」を設定し、それに対して「漢語」を設定することになる。このことからすれば、「中国語」を書きあらわすために使われている漢字と、「漢語」を含めた日本語を書きあらわすために使われている漢字とを、「中国漢字」「日本漢字」という呼称によつて区別することには一定の意義があると考えられる。本稿では、両者を区別する必要がある場合のみ、そのような呼称を使うことにし、

その必要がない場合は「漢字」という呼称を使う。

「仮名書き」は「仮名で書くこと」である。「仮名」には平仮名と片仮名とがある。両者を区別する必要があるれば、「平仮名書き」「片仮名書き」という呼称を使うことにするが、その必要がない場合は「仮名書き」という呼称を使う。

「仮名書き」は「仮名で書くこと」であるので、その書き方がひろく共有されているかどうか、書き方にかかわって、何らかの原理が想定できる場合に、その原理に合致しているかどうか、過去においてその書き方が実際に行なわれたかどうか、などは含意しない。また、仮名で書くことによってその語の語形が示されているという意味合いで、「仮名書き語形」という用語を使う。

さて、例えば、承平五（九三五）年頃には成立していたと考えられている『土左日記』には、「にき（日記）」（十二月二十一日）、「とうそ（屠蘇）」（十二月二十九日）、「てけ（天気）」（一月九日）、「さうし（精進）」（二月十四日）、「かいそく（海賊）」（二月二十一日・同二十三日）、「同二十五日・同二十六日・同三十日」）、「ていけ（天気）」（一月二十六日）、「すはう（蘇芳）」（二月一日）、「れい（例）」（二月五日）、など、仮名書きされた漢語がみられる。その一方で、「講師」（十二月二十四日・一月二日）、「郎等」（十二月二十六日）、「白散」（十二月二十九日）、「願」（二月二十一日）、「五色」（二月一日）、「明神」（二月五日）、「病

者」（二月七日）など、漢字書きされた漢語もみられる。中国語が漢字で書かれていることは当然のこととて、そのことからすれば、漢語も漢字で書くことが「デフォルト」であるとみることがもつとも自然である。そうであれば、「デフォルト」ではなく、仮名で書いた理由が、一つ一つの場面で問われることになるが、本稿では「なぜ仮名で書いたか」ということではなく、「漢語を仮名で書く」あるいは「仮名で書かれた漢語」に注目した場合、どのような知見が得られるかということについて考えることを最終的な目的とし、時間軸に沿って、幾つかの文献を採りあげ、それらの文献にみられる「漢語の仮名書き」をまずは概観することを試みることにする。

一 『色葉字類抄』にみられる漢語の仮名書き

今ここでは尊経閣に蔵されている三巻本をおもに使うことにするが、三巻本は橘忠兼という人物によって天養から治承の間（一一四四～一一八二）に編まれたことがわかっている。したがって、十二世紀半ば頃の成立ということになる。『色葉字類抄』には次のようなかたちで漢語の仮名書きがみられる。

- 01 鸚鵡 アウム あ篇動物部
- 02 幼少 エウセウ え篇暁字部
- 03 證據 シヨウコ し篇暁字部
- 04 寵愛 チヨウアイ ち篇暁字部
- 05 朝廷 テウテイ て篇暁字部

三卷本『色葉字類抄』には、右に示したように、「アウム」という仮名書き語形を伴った漢字列「鸚鵡」があ篇動物部に収められており、仮名書き語形の先頭の仮名が、当該見出しの所属する篇を決めていることがわかる。同じあ篇動物部には、「汗溝（右振仮名カンコウ）アセミソ」という見出しが置かれているが、この見出しは「アセミソ」という和語に漢字列「汗溝」をあてているという認識のもとに配置されていることがわかる。

二十卷本『和名類聚抄』巻十一「牛馬體第百五十」に見出し「汗溝 李緒曰汗溝欲深（汗溝俗云／阿世美蘇）」がみられる。そのことからすれば、中国語「汗溝」があつたことはたしかなことといえよう。狩谷掖斎『箋注和名類聚抄』は「文選赭白馬賦注引相馬経」と指摘している。『文選』に収められている顔延之の「赭白馬賦」には「膺門沫赭、汗溝走血」（膺門に沫^{あか}赭く、汗溝に血を走らす）とあるが、この箇所について李善注は「相馬経曰膺門欲開、汗溝欲深」（相馬経曰く、膺

門は開ならんことを欲し、汗溝は深ならんことを欲す）と記している。

漢字列「汗溝」の右側には「カンコウ」と振仮名が施されているが、これは「汗」「溝」にそれぞれ発音を示すために施されたものである可能性がある。見出し「黄牛 アメウシ」においては二字漢字列「黄牛」の上字「黄」だけに「クワウ」と右振仮名が施されており、そうした例は少なくない。「汗」「溝」「黄」のような単漢字も、それぞれが語をあらわしているとみることができるので、これらの振仮名も広義の「漢語の仮名書き」とみることができるが、本稿では、語と対応していることが確実である二字漢字列をおもな観察対象とする。

三卷本『色葉字類抄』には、例えば「幼」字を含む、次のような見出しがある。

- 06 幼稚 エウチ え篇暁字部
- 07 幼敏 エウヒン え篇暁字部

02 「幼少 エウセウ」06 「幼稚 エウチ」07 「幼敏 エウヒン」においては、いずれも「幼」字には「エウ」が対応している。その点で統一であるといえる。このような整理のしかたは、次のような二つの「みかた」に基づく整理であることになる。

①二字漢字列で書きあらわすような漢語であつても仮名で書く場合に、単漢字一字ずつに分解して、それぞれの書き方を組み合わせる仮名書きしていた。

②単漢字一字ずつの書き方は固定していた。

②が成立するかどうかは、観察時期によつて異なることはいうまでもない。ア行の「エ」とワ行の「エ」とが音韻として区別されている時期と両音韻とが区別されない時期とでは、②の「固定」状況は異なる。ア行の「エ」とワ行の「エ」とは十二世紀末ぐらいに区別されなくなつたと考えられている。尊経閣本は「寿永年間（一一八二～八四年）の書写とみられ」（一九九五年、世界思想社『日本古辞書を学ぶ人のために』二八九頁上段）であり、そのことからすれば、ア行の「エ」とワ行の「エ」とは語のかつての発音に対応して使用されていたよい。ただし、山田孝雄が『色葉字類抄攷略』（一九二八年、西東書房）において指摘しているように、ほ篇辞字部の「囀 ホソコエ」は、（かすかな声）という語義をもつ語「ホソコエ」であるならば、ア行の「エ」とワ行の「エ」とが区別されている時期には「ホソコエ」と書かれていたはずである。とすると、尊経閣本が写したテキストがすでにそうであつたか、あるいは写したテキストには「ホソコエ」とあつたが、尊経閣本書写者が書写にあたって、「エ」を「エ」と写したか、いず

れかということになる。ちなみにいえば、尊経閣本を江戸時代に書写したと考えられている「黒川本」には「囀 ホソコエ」とあり、尊経閣に蔵されている、永禄八（一五六五）年に写された二巻本『色葉字類抄』には「囀（右振仮名ホソコエ）」とある。

尊経閣本の「ホソコエ」を「仮名遣いの違例」と呼ぶことはあろう。その「違例」の「違」は、かつて音韻と仮名とに「一対一（にちかい）」対応があつた時期の書き方「ホソコエ」を基準とした時に、それに合致しないという意味合いで「違例」ということになる。

この「仮名遣いの違例」というとらえかた及び呼称は、使おうと思えば、いついかなる時期においても使うことができるけれども、日本語の観察、分析上の意義ということからすれば、「いついかなる時期」においても有効であるとはいえないのではないか。

すなわち、例えば、ア行の「エ」とワ行の「エ」とが区別を失つた十二世紀末から、さらに五百年ほど経つた江戸時代に書かれた文献に関して、ア行の「エ」とワ行の「エ」がどれだけかつて書かれていた書き方を保持しているかという観察は、もちろんすることができ。その結果、「かつて書かれていた書き方」に完全に一致したとする。それは、江戸時代にア行の「エ」とワ行の「エ」が音韻として区別されていたことを示しているのではなく、（結果として）「かつて書かれていた書き方」が保存されているということを示しているとみるしか

ない。

そしてその次に、「なぜ保存されているか」という問いをたてることができるかもしれないが、それが意義ある問いになるかどうか。あるいはア行の「エ」は百パーセント保存されていて、ワ行の「エ」は五十パーセントしか保存されていないことがわかったとして、その百パーセント、五十パーセントを説明することができるとか。今観察対象としている文献が「かつて書かれていた書き方」を保存しようとして書いているかどうかはそもそもわからない。それなのに、「かつて書かれていた書き方」とどの程度一致しているかを探るのは、「ひとまずの手順」としてはわからないではないが、それにとどまるのではないだろうか。

右の例でいえば、「幼少」を「ヨウショ」と発音するようになっていく時期とそうでない時期とでは「固定」状況は異なる。ある文献が統一的に書かれているかを調べるということは、それはそれで一つの観点ではあるが、どのようなことを言語現象として観察対象にしているかによつて「統一的」ということがさほど意義をもたない場合もある。

二 『仮名文字遣』にみられる漢語の仮名書き

築島裕は『歴史的仮名遣い―その成立と特徴』（一九八六年、中公新書）において、『仮名文字遣』の成立も、延文、康安、貞治（一三六二～一三六八）以後ということになるであろう（三十九頁）と述べている。本稿もこの見解に従うことにする。

稿者は「日本語を仮名のみで書くにあたって、どのように仮名を使うか」ということを一義的にテキスト作成の目的としていると思われる（二〇一六年、和泉書院『仮名遣書論攷』四頁）テキストを仮名遣書とみている。それに照らして、『仮名文字遣』は仮名遣書といつてよい。

『仮名文字遣』には（テキストによるが、おおむね）百を超える漢語が見出しとしてとりこまれている。先の定義からすれば、『仮名文字遣』においては、漢語をどのように仮名で書くか、が採りあげられていることになる。一つの例として、東京大学国語研究室に蔵されている「文明十一年本」と呼び慣わされてきているテキストの「う部」に掲げられている漢語を幾つかあげてみる。添えられている漢字列は適宜調整した。

08	こうはい	紅梅
10	くわんさう	萱草 わすれ草也
11	かれうひんか	迦陵頻伽
19	らうそく	蠟燭
20	しわう	雌黄
21	ねうはち	鏡鉢
22	しやうこ	鉦鼓
25	ふせんれう	浮線綾
26	すはう	蘇芳
27	さう人	相人
28	ようとう	用途
29	せうそく	消息
30	らうろう	牢籠
31	せいへう	聖廟
32	へうゑい	苗裔

拙書『仮名遣書論攷』において、「行阿は『源氏物語』の注釈書である『原中最秘抄』を完成させており、『仮名文字遣』は『源氏物語』そのもの及び『源氏物語』の注釈書とかかわりがふかいことがこれまでに指摘されている」(四十一頁)と述べた。高瀬正一は「『仮名文字遣』の語彙―文明十一年本と中古文学語彙との関連―」(『愛知教育大学大学院国語研究』第二十一号、二〇一三年)において、文明十一年本の見出しを整理し、その総見出し数を一〇三四とみた上で、『源氏物語』に用例のみられる『源氏物語』出自語彙が四三三例(四十一・九パーセント)を占めると指摘し、『源氏物語』を『仮名文字遣』の「第一の出典である」と述べる。そのことからすれば、『仮名文字遣』が見出しとしている漢語には、『源氏物語』で使われ、かつ仮名書きされていたものが(多く)含まれていることが期待される。

例えば、「かれうひんか(迦陵頻伽)」は「紅葉賀」に「これやほとけの御かれう／ひんかのこゑならむときこゆ」(大島本一ウ五行目、『源氏物語大成』二三七⑦、／は改行位置)とみえる。大島雅太郎旧蔵飛鳥井雅康等筆本『源氏物語』には、「関屋」の巻末に「文明十三年九月十八日依／大内左京兆所望染紫毫／者也／権中納言雅康」という識語がみられ、この識語は「関屋」のみではなく、全体にかかわるものと考えられている。とすれば、大島本は文明十三(一四八一)年に書写されたことになる。大島本の「かれうひんか」の右傍には(おそらく)朱筆で「迦陵頻伽」と漢字列が書き込まれている。

同じ箇所が、「鎌倉時代末期から吉野時代にかかるころのもの」と(日本古典文学影印叢刊7『源氏物語』五)一九八〇年、貴重本刊行会、「解説」(五七八頁)推測されている穂久邇文庫本には「これや／ほとけの

御かれうひんかの聲ならん／ときこゆ」(二ウ)とある。また室町中期写と考えられている保坂本「紅葉賀」には「これ／や佛の御迦陵頻伽のこゑならんときこゆ」(二ウ)とあつて、「カリョウビンガ」は漢字で書かれている。漢字で書くならば、「仮名でどのように書くか」は問題にならない。

漢語を「仮名でどのように書くか」ということがどの程度切実なことであつたかということについても一度は考えておく必要がある。先に、『仮名文字遣』を、「日本語を仮名のみで書くにあたつて、どのように仮名を使うか」ということを一義的にテキスト作成の目的としている」と認めた。すなわち『仮名文字遣』を仮名遣書と認めた。しかし、『仮名文字遣』がそうしたことを目的として当初編まれたとしても、現在残されている『仮名文字遣』テキストがいささかの変容もなく、当初の通りの姿を保っているとは考えにくい。仮に「増補」というような方向で変容があつたとして、その「増補」も当初の目的にぴつたりとかなつた「増補」が行なわれたとはむしろ考えにくい。「増補」が行なわれた」という表現は、ある意図をもつた編集者が増補した、ということを思い浮かべやすいが、実際には、『仮名文字遣』テキストの書写が繰り返されていく間に見出しが増えていった、とみるしかなく、その時々々の書写者の「目的」にしたがつて、加筆修正が行なわれたはずである。「その時々々の書写者の「目的」がつねにぴつた

りと重なっていることは考え難く、「当初の目的」というものがあつたとして、その「当初の目的」とはそぐわない「増補」あるいは加筆修正が行なわれることは十分にあり得る。そうした「当初の目的とはそぐわない増補あるいは加筆修正」を仮に「ノイズ」と呼ぶとすれば、テキストはなにほどこか、あるいはさまざまな「ノイズ」を蓄積しながら書写されていくとみるのが自然であろう。

つまり、現在の『仮名文字遣』が収めている漢語の見出しがすべて同じ理由でとりこまれているとは限らない。稿者は、何らかの「編集」が行なわれているテキストを「非辞書体資料」と呼ぶ。その意味合いにおいて、『仮名文字遣』は辞書体資料である。辞書体資料は「文脈」をもたないために、さまざまな「情報」が(いわば脈絡なく)とりこまれやすい。『仮名文字遣』の見出しは「仮名書き語形+漢字列」という形式をとる。となれば、この形式で抽出できれば、『仮名文字遣』内に、あたかも見出しのような顔をして、「情報」をとりこむことができる。そのようにしてとりこまれた見出しが「仮名でどのようなことか」ということに関して、それほどかわりがないということが、ないとははいえないであろう。過去に編まれた辞書体資料に対して、現代刊行されている辞書と同じような斉整とした「統一」を求めることはできない、とまず認識する必要がある。それは自明のことであろう。

大島本のような『源氏物語』をよんでいて、仮名書きされた「かれうひんか」に遭遇した。そのかたわらには、漢字列「迦陵頻伽」が添えられている。仮名書き語形「かれうひんか」とともに漢字列「迦陵頻伽」を抜き書きすれば、そのかたちで『仮名文字遣』に収めることはできる。こうしたプロセスには、「カリヨウビンガ（迦陵頻伽）」という漢語を仮名でどう書けばよいか、という問いは含まれていない。

あるいは『河海抄』（伝兼良筆、天理図書館蔵）のような『源氏物語』の注釈書をよんでいると、「これやほとけの御かれうひむのこゑならむと」（巻第四、二十二ウ）と『源氏物語』の「本文」が抜き書きされ、そのかたわらに、「聖天中天 伽陵頻伽聲 法花経」と記されている。これは『妙法蓮華経』化城喻品第七にみえる行りである。ここでは「かれうひむ」とあるが、それはそれとして、こうした『源氏物語』の注釈書から、漢語の仮名書きと漢字列とが一具のものとして抜き書きされることは考えられる。

さて、大島本「紅葉賀」を読み進めていくと「ひとひの源氏の御ゆふかけゆゝ／しうおほされてみす経なと所／に／せさせ給ふをきく人もことはりとあは／れかりきこゆるにとうくの女御は／あなかなりとにくみきこえ給ふかい／しろなと殿上人地下も心ことなりとよ／人におもはれたるいうそくのかきりと／のへさせ給へり」（四才八行目・『源氏物語大成』一三九④）という行りがある。

『河海抄』には「いうそくのかきりと／のへさせたまへり／右族也 華族事也 又云有職」（巻第四、二十四才）とある。文明十一年本『仮名文字遣』は「い部」に「いうしよく 右族 有職」とある。

あるいは大島本「若菜下」には「かむのきみは／むねつふれてかゝるおりのらうろうなら／すはえまいるましくけはひはつかしく／思ふも心の内そはらきたなけりける」（八十四才六行目・『源氏物語大成』一一八九①）とあり、ここに「らうろう」がみえる。大島本はかたわらに漢字「牢籠」を添え、「驚サハク心也」と注記する。漢語「ロウロウ（牢籠）」は藤原実資（九五七―一〇四六）の日記である『小右記』などでも少なからず使われている漢語であるが、そうした漢語が『源氏物語』にも使われていることは興味深い。保坂本には「かむのきみ／はむねつふれてかゝるをりのらう／ろうならすはえまいるましくけはひ／はつかしくおもふも心のうちこそは／ら／きたなからめ」（九十五才）とあり、とある。

『土左日記』が当初どのように書かれていたかを現存している、いわゆる根幹写本から考えた場合、漢字で書かれている漢語と仮名で書かれている漢語とがあつたことが推測できる。『土左日記』のように仮名勝ちに書かれているテキストを仮に「仮名文テキスト」と呼ぶとすれば、「仮名文テキスト」にはそもそも漢語はあまり使われず、使われている漢語も仮名で書かれることがあつたと推測できる。先に漢

語は漢字で書くことをデフォルトとみる、と述べたが、そのことからすれば、仮名勝ちに書くという「仮名文テキスト」の「表記体」としての「要請」が漢語を仮名で書かせた、ということになる。「漢語は漢字で書くというデフォルト」と「表記体としての要請」の拮抗の中で、当初は仮名書きされていた漢語に漢字があてられるということはあったであろう。

ここまでは「文明十一年本」と呼ばれる、見出しが千程度のテキストを『仮名文字遣』として使ってきた。慶長頃に出版されたと目されている「慶長版本」と呼ばれているテキストには一九〇〇ちかい見出しが掲げられており、「文明十一年本」と比べると見出しがかなり多くなっている。「文明十一年本」にはみられず、「慶長版本」が見出しとしている漢語としては、例えば、「いし 醫師」(い部)、「えいよう 英耀」(え部)、「ゑいかい 嬰孩」(ゑ部)、「えいかい 嬰孩」(え部)、「えいてつ 映徹」(い部)、「えうてう 窺窺」(え部)、「えんきやく 厭却」(え部)、「えんせつ 演説」(え部)、「えんてむ 炎天」(え部)、「おうこ 擁護」(お部)、「う部」(くはさい 火災) (い部)、「けいこ 稽古」(い部)、「けうやう 孝養」(う部)、「さいはい 再拜」(い部)、「しゆかい 酒海」(い部)、「せうよう 逍遙」(え部)、「ちゑ 智恵」(ゑ部)、「ていはん 帝範」(い部)、「てうし 調子」(う部)、「てうてい 朝廷」(い部)、「にようみん 女院」(み部)、「ひえん 飛檐」(え部)、「ふよう

芙蓉」(う部)、「ほうみん 法印」(み部)、「ほうりやう 法令」(う部)、「めなう 馬脳」(う部)、「らうもう 老耄」(う部)、「れうし 料紙」(う部)、「れうり 料理」(う部)、「いんくはい 員外」(い部)、「みんくはる 員外」(み部)、「みんし 院司」(み部)、「ゑはい 壊敗」(ゑ部)、「おんてき 怨敵」(お部) などがある。

三 『節用集』にみられる漢語の仮名書き

江戸時代に刊行された『節用集』を「近世節用集」と呼び、それ以前に成った『節用集』を「古本節用集」と呼ぶことがある。今ここでは、「古本節用集」を観察対象とする。『節用集』の見出しは「漢字列」で、それに振仮名を施すことが多いので、振仮名までを含めて考えれば『節用集』の見出しは「漢字列＋振仮名」ということになる。漢字列が対応している語が漢語であれば、それに施された振仮名は「漢語の仮名書き」にあたることになる。ただし、この場合の「漢語の仮名書き」は「漢語を仮名で書いたもの」ということであって、その形が一般的に使われているということやその形が当該時期に規範的な書き方として認識されていたということを(当然のことと考えるが)含意しない。振仮名が施されているテキストを書写する場合、振仮名も含めて丁寧に書写すれば、(ほぼ)書写原本どおりのテキストができあ

がるであろうが、漢字列だけをまず写して、振仮名は自身の責任のもとに施していくという写し方があったことはたしかなことといえる。それは振仮名の第一番目の仮名と見出しの所属部の不一致ということによつて確認することができる。

例えば正宗文庫本の「て部」には「チャウモク」という振仮名が施された「鳥目」という見出しと、「チャウシ」という振仮名が施された「銚子」という見出しが置かれている。見出し「鳥目」「銚子」を「て部」に置く時点では、「テウモク」「テウシ」という振仮名を施すはずだったと思われる。あるいは正宗文庫本が依拠した書写原本には、「テウモク」「テウシ」とあつたにもかかわらず、正宗文庫本書写者が「チャウモク」「チャウシ」と振仮名を施した可能性もある。この場合、当該語の発音は「チョーモク」「チョーシ」となっており、その「チョー」にあたる部分を仮名でどう書くかということに「揺れ」が生じていたとみるのが自然である。

あるいは大谷大学本の「ち部」には「テウテイ」「テウラン」「テウデウ」という振仮名が施された見出し「朝廷」「朝恩」「重畳」が置かれている。これらの見出しが「ち部」に置かれていることからすれば、例えば「チョウテイ」「チョウラン」「チョウデウ」のような、「チ」から始まる書き方が想定されていたと考えるのが自然であろう。しかし、大谷大学本の書写者は、振仮名を施す時に「テ」から始まる書き

方をしたために、「テ」から始まる振仮名が施された見出しが「ち部」に置かれることになった。見出し「朝恩」を伊勢本系統で「古本」と呼ばれる正宗文庫本、大谷大学本、明応五年本であたれば、正宗文庫本「チャウラン」、大谷大学本「テウラン」、明応五年本「チョウラン」と「揺れ」がある。古本節用集全体でいえば、正宗文庫本の「チャウラン」は正宗文庫本のみにみられるかたちであるが、「テウラン」「ヨウラン」は「揺れ」ている。「朝」のいわゆる「字音仮名遣い」は「テウ」であるので、「チョウ」「チャウ」は「字音仮名遣い」と合致しないかたちであることになる。「チャウ」はともかくとして「チョウ」が一定数あることからすれば、少なくとも古本節用集が「字音仮名遣い」を依拠原理としていないことは明かであろう。

古本節用集全体をみわたしにいった場合に、「朝恩」の仮名書き語形が「テウラン」「チョウラン」で揺れていると述べた。古本節用集を「伊勢本系統」「印度本系統」「乾本系統」の三系統に分けてとらえることは一般的になっていると思われるが、「伊勢本系統」内でも「チョウラン」「テウラン」がみえ、「印度本系統」内でもそうであるので、このことから、テキストの系譜的聯繫にはかわからない、ということが明かである。(表現がいささか妙になるが)「揺れている状態」が共有されているとみるべきであろう。つまり、「伊勢本系統」はこういう傾向がある、「印度本系統」はこういう傾向がある、ということ

さえもいえないようなことになる。現代人がいわば便宜的につけた「伊勢本」「印度本」という名称、あるいは一つのみかたとして示した系譜的な観点が、どのようなことを意味していて、どのような分析には有効であるかを考えることなく、「紋切り型」にそうした名称、系譜的な観点をあてはめることによって、「見えなくなること」は案外と多いのではないだろうか。

古本節用集は、文献群としてとらえた時に、当該時期の日本語の観察に資することが多い。亀井孝編『五本対照改編節用集』（一九六〇～一九七〇年、非売品）は、黒本本、伊京集、堺本（天正十八年本）、饅頭屋本（重刊本）、易林本（平井版）の五本の対照が可能のように編集されているが、それはそもそも古本節用集を文献群としてとらえるという「発想」を根柢にもつものと思われる。そして、それが使用されていたという「歴史」はそうした「発想」が承認されていたということを意味するのではないか。異なるタイトルをもつテキストを一つのデータとして扱う「コーパス言語学」が認められている現在からすれば、『五本対照改編節用集』は『節用集』コーパスといつてもよい。堺本には次のような見出しがある。

趙昌（右振仮名チヨウシヤウ）「宋朝画工／於得菓子」（ち部人倫門）
趙昌（右振仮名テウシヤウ）「宋朝画工／尤得花」（て部人倫門）

語釈にあるように「趙昌」は中国五代の北宋初め頃の画家で、黄筌（こうせん）、徐熙（じょき）に続く花鳥画家として知られているが、生没年は未詳である。東京国立博物館には、「趙昌の曲り竹」として知られる作品が蔵されているが、この作品の伝承筆者が趙昌である。この作品には足利義教の印ともいわれる「雜華室印」の印がおり、日本では東山御物として珍重されたものであることがわかる。他にも趙昌を伝承筆者とする作品が日本に伝えられている。こうしたことからすれば、実際の筆者が趙昌であるかどうかはともかくとして、室町期には、趙昌を伝承筆者とする作品が日本に伝えられ、知られていたと推測できる。古本節用集には「馬遠（バエン）」「宋朝／画工」（堺本は部人倫門）、「王元章（ワウゲンシヤウ）」「元朝画／工得梅」（堺本わ部人倫門）、「牧溪和尚（モツケイヲシヤウ）」「宋朝無準和尚弟子／尤得墨画也山水」（堺本も部人倫門）のように、中国の画家の名前が少なからず見出しとなっている。それは古本節用集を写すような人の興味のありどころを反映していると考えるのが自然であろう。

しかし、だからといって、室町時代に限ったとしても、宋朝の画工「趙昌」を仮名で書かなければならないという具体的な場面がどれだけあったのだろうか。「趙昌」という画工については、古本節用集を写すような人は知っていた。それが「チョーシヨ」と発音するという

こともわかっていたとして、その「チョーショー」という発音を「仮名で書かなければならない場面」が『節用集』の見出しとなっている漢字列に振仮名を施す場面ではないか。その時に、「趙」字の「字音仮名遣い」がどうであるか、ということが想起されるのだろうか。そういう場面で想起できるほど、「字音仮名遣い」は広通していたか。あるいはまた、「字音仮名遣い」がどうであるかは想起しないにしても、「趙昌」を仮名で書いたかたちに実際にどのくらい接していたか。あるいは「趙」字を含んだ漢語の仮名書き語形にどのくらい接していたか。

例えば、「趙」字を含んだ漢語に関していえば、『日本国語大辞典』第二版は「趙」を「字音語素」とした語をあげておらず、「趙」を頭字とする語十六を見出しとするが、いずれも固有名詞である。このことからすれば、「趙」字を含んだ漢語が多くないことが推測される。また先に述べたように、「趙昌」を仮名書きする場面が想定しにくいとすれば、結局は「チョー」と発音する語を仮名でどう書くか、ということになる。それは、「字音仮名遣い」においては、同じ「チョー」という発音であっても、「重」であれば「チヨウ」、「長」であれば「チヤウ」、「朝」であれば「テウ」、「蝶」であれば「テフ」で書くということとを離れるということである。先に述べたように、漢字列「朝恩」に、正宗文庫本は「チヤウヨン」、大谷大学本は「テウヨン」、明応五年本

は「チヨウヨン」と振仮名を施しており、四つの可能性のうちの三つが実際に看取できる。それ自体が、漢語の仮名書き語形が一定していないことを示している。

古本節用集は「いろは分け十意義分類」を採っているので、古本節用集で自身が求める見出しを探し出そうとすれば、まず見出しの仮名書き語形を想起する必要がある。「寵愛」という見出しを探し出そうとして、「テウアイ」という振仮名を想起すれば「て部」を、「チヨウアイ」という振仮名を想起すれば「ち部」にあたることになる。

例えば、岡田希雄旧蔵本であれば、振仮名「テウアイ」を施して「て部」に見出しを置く。岡田希雄旧蔵本を調べるにあたって、「チヨウアイ」をいう振仮名を想起して「ち部」にあたってもそこに見出し「寵愛」はない。あるいは天正十七年本を調べるにあたって、「テウアイ」という振仮名を想起して「て部」にあたってもそこに見出し「寵愛」はない。あるいはまた、玉里文庫本を調べるにあたって、「チヨウアイ」という振仮名を想起して「ち部」にあたると、そこに見出し「寵愛」を見いだすことができるが、振仮名は「テウアイ」であるというようなこともある。大谷大学本を初めとして、増刊下学集、明応五年本、増刊節用集、横本、堺本、黒本本、和漢通用集、小汀本、徳遊寺本、南葵文庫本、草間直方本、寛永十九年本、義知本など複数のテキストは、「チヨウアイ」を「ち部」に、「テウアイ」を「て部」に「双

掲」する。今、ここでは、同一とみなし得る見出しが二つの部に掲出されていることを「双掲」と呼ぶことにするが、見出しを双掲すれば、書き方は「問題」にならない。言い換えれば、「寵愛」という見出しを探していて、「チヨウアイ」「テウアイ」どちらの書き方を想起しても、求める見出し「寵愛」にいきつくことができる。

四 江戸時代の仮名遣書

天保元（二八三二）年八月に刊行されたと考えられている大蔵永常の編んだ『雅俗仮字都架比』（文章仮字用格）という仮名遣書がある。ここでは「文章仮字用格（ぶんしょうかなづかい）」と呼ぶことにする。この仮名遣書は相当数の漢語を見出しとしている。「凡例」には次のように記されている。句読点を補って示す。振仮名は省いた。「すべて」は「すべて」の誤りであろう。便宜的に番号を附した。

- 1 凡此書に載するところは、文字の音訓、言語の雅俗に拘はらず、日用に便りなるものをすべて集む。さて、いゝをおえゝの六字は、雅俗ともに文章に用ふる所の文字は、悉くあげてもらふことなし。
- 2 同じ文字を二言にも三言にもいさすことあり。龍は漢音りよう、呉音はりう、のごときは二タ所にいさす。又、同じ二言にても、仮名

の違ふことなり。法の字、漢音はふ「はの部／に入」、呉音はふ「ほの部／に入」なり。音便にいふときはほうなり「法師などの／たぐひなり」。これら、その文字につきてかはれり。見る人、字同じくして仮名の異なるをうたがふことなかれ。

3 丁子の仮名を見出るにちの部の四言の界引の上にやの字ある條を見るべし。もし丁子の字なきときは三言の條に丁の字あるを見てしるべし。それもなきときは庖丁「はの／部」駕輿丁「かの／部」の文字を捜し求めてその丁の字の仮名ちやうなればそれに子の字を合せて見るときは丁子の仮名しらるる也。この例にて余も準へてしるべし。

4 行の字音はかう也。されども常にはこうのごとくに唱へ、油の字音はいうなり。これも常にはゆうのごとくなふ。かゝる類ひは行はかの部もこの部も、油はいの部もゆの部も、見るべし。すべて音訓ともに頭字の仮名まぎらはしきは幾所をも検して尋ね捜すべし。

1 によつて、『文章仮字用格』が「いろは四十七文字」を、部として設けていることがわかる。仮名遣書である以上、「ある語を仮名でどのように書くか」ということを示すことが目的であるので、当然のことともいえよう。2では同じ漢字が二つの音をもつ場合について述べている。

3では漢語「丁子」のかなづかいを調べるにあたつて、「ちの部」に「丁

く」がなかったら「はの部」の見出し「庖丁」の「丁」あるいは「かの部」の「駕輿丁」の「丁」を見ればよいと述べている。これは、一つの漢字には同じかなづかいをあてていることの表明であり、それだけ『文章仮字用格』内部においては統一がはかられていることがわかる。

その一方で、「字音」に限つてのことと「よむ」のが自然であろうが、4によれば、「常にはこのごとくに唱へ」ている語、すなわち当代の発音で「コウ」と発音している語は、「こう」の箇所を調べる人がいるかもしれないが、「かう」の箇所も調べるように促している。4の末尾には「音訓ともに頭字の仮名まぎらはしきは幾所をも検して尋ね搜すべし」とある。これは「音」すなわち漢語に関しても、「訓」すなわち和語に関しても、「まぎらはし」いものは「幾所をも」調べることが促している。ただし、見出しを双掲しているわけではなく、見出しは『文章仮字用格』がしかるべき、と判断した箇所に挙げられている。これは『文章仮字用格』が仮名遣書であるために、ある語のかなづかいを二箇所に掲出することは仮名遣書としては選択しにくく、『節用集』のように双掲することができない、ということであろう。そうした点からすれば、『文章仮字用格』は『文章仮字用格』としての「判断」に基づき、いわば「正しい」と思ふかなづかいを載せていることになる(註1)。

右のことからすれば、『文章仮字用格』は漢語も含めて、「かなづかい」ということがらについて一定の到達を示していると考えることができる。そのことからすれば、江戸時代における漢語の仮名書きについて考えるためには、さらにひろくさまざまな文献にあたる必要がある。

おわりに

沼本克明『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ずー字音仮名遣い入門ー』(二〇一四年、汲古書院)は、書名に「帰納」と「演繹」とを含む。「字音仮名遣い」に関しての「帰納」とは「一字一字の漢字の字音が全て古書の実例として見出され」(同書「はしがき」iページ)ること、で、「演繹」とは、『広韻』や『韻鏡』といった韻書や韻図に依拠して漢字音の仮名書き形を導き出すことの謂いである(註2)。

沼本克明(二〇一四)は「字音仮名遣いの根本的な問題」は本居宣長らが「取った演繹法には根本的な欠陥が有った」と述べ、それは「韻鏡や広韻の音韻体系と日本呉音・日本漢音とが体系を異にせずれていたという事実に基づいていなかったということである」(二十三頁)と述べる。そのことに否やはないが、和語の仮名書きと異なり、漢語

の仮名書きはそもそもその機会が少なく、学術的な場面以外ではごく限定されたものと思われる。それは単漢字をどう仮名で書くかということではなく、漢語をどう仮名で書くかということであつたはずで、本稿の題名もそうしたことを含意する。「はじめに」で述べたように、本稿は「漢語の仮名書き」について考えるための概観であるという自覚がある。さらに「漢語の仮名書き」について考えていきたい。

【註】

註1

『仮名文字遣』『文明十一年本』には「をそれ 恐怖 畏「おその時は／おなり」(を部)、あるいは「を」と、第「おとうとの時は／おなり」(を部)という見出しがみられる。これらは「を／お」にかかわることであるので、アクセントの高低によつて「を／お」を使うといういわゆる「定家かなづかい」とかわつての注記である可能性もあるのでひとまず措くことにする。『仮名文字遣』『慶長頃版本』には「を／お」ではなく、「あまえて あまへても 甘苦 甘辛」(え部)、「あまへて あまえて共 甘辛 甘苦」という体の見出しが散見する。これは「え部」に見出し「あまえて」をあげ、その見出し内において「あまへて」という書き方を認め、「へ部」に見出し「あまへて」をあげ、その見出し内において「あまえて」という書き方を認めており、結局、「文章仮字用格」を一方に置けば、(正しいと判断した)一つのかなづかいをあげるのではなく、複数の書き方を認めている点において、慶長頃版本『仮名文字遣』を実際のとみることもできるが、やはり仮名遣書としては「特殊」であるとみておくべきか。

註2

「二字」の漢字の字音が全て古書の実例として見出されれば問題は何か無い」は説明のための表現としては粗くないか。「漢字の字音」では

なく、例えば「漢字音の仮名書き形」と表現すべきであろう。「字音仮名遣い」は「中国語を書きあらわすための文字である漢字があらわしている中国語の発音を日本語の音韻体系内でうけとめ、それを仮名で書いた場合の書き方」であるという認識がまず必要であろう。沼本克明(二〇一四)は「字音仮名遣いは如何なるものとしても提示し得るものであり、その極端な在り方として言えば、帰納法に徹して古書に用例があるもののみを提示するの一案、「広韻」「韻鏡」という中国側の韻書や韻図に徹底的に依拠して提示するの一案、或いは日本漢字音としての提示は不可能として、「玉篇」や「広韻」「集韻」の反切のみを列挙することで仮名遣いを抛擲する立場もあり得る問題である」「(はしがき) ii」と述べている。「字音仮名遣いは」と始まる文が「問題である」と終わることはそれはそれとして、ここでは「仮名遣いを抛擲する立場もあり得る」と述べられてはいるものの、「反切のみを列挙する」というのは、当該漢字の音を示す方法であるはずで、それがいわば同列で述べられていることからすれば、沼本克明(二〇一四)は、「日本漢字音をどのように仮名で書くか」という枠組みではなく、「漢字音をどのように示すか」という枠組みの中で論じられていると思われる、本稿とは枠組みそのものの、すなわち「問題設定」が異なると考える。

Kango Written in *Kana*

KONNO Shinji

Abstract

Kango is generally written in *kanji*. However, it is evident that *kango* was written in *kana* during the period from the early 10th century when *kana* first appeared to the end of the Edo Period. ‘*Tosanikki*’ is a form of Japanese literature written in *kana* and it contains a few *kango* passages written in *kana*. Also, in the ‘*Irohajiruisho*’ dictionary, completed in the mid-12th century, *kango* was written in *kanji* supplemented by a form of *kana*. The words covered in this dictionary were written in *kana* and the dictionary index was arranged alphabetically based on the first *kana* of each word. This is why supplementary *kana* was needed for *kango* words in this dictionary. There is little information about how *kana* was given alongside *kango* words since this happened infrequently. Therefore, it is speculated that each *kango* word was pronounced orally first and then transcribed phonetically in *kana*. In literature such as ‘The Tale of Genji,’ *kango* words written in *kana* existed. A collection of *kango* words written in *kana* was titled ‘*Kanamojizukai*.’ In the ‘*Setsuyo-shu*’ dictionary, *kana* was given alongside *kango* words, but there were some variations and inconsistency. Also, they purposely showed the variations in the index. This denotes that there were various ways of giving *kana* alongside *kango* words around the Muromachi Period and people in that period were aware of this. When observing the *kanazukaisho* titled ‘*Bunshokanazukai*,’ completed the end of the Edo Period, the way *kana* was given alongside *kango* words is consistent. Therefore, this suggests there were some changes in how *kango* was written from the Muromachi Period to the Edo Period. It became clear that we need to look closely at what happened between those periods as a research issue.